2011年　9月28日・西日本新聞「西日本詩時評」では

西日本詩時評
　　岡田哲也

刊行された『山田かん全詩集』
しっかり原爆とわたりあう
今も見事に力と光

風化する記憶　開花する沈黙

　秋分の日より、私には秋彼岸の中日です。かつてこの日に、寺参りやおハギを食べさせられた名残りでしょうか。祝祭日や記念日は、私たちがそのことを忘れないために設け定めた格別の日です。原爆の日や3・11のように国民的な日であっても、サラダ記念日のように個人的なものであっもいいわけです。
　さて先頃『山田かん全詩集』（コールサック社）が出ました。長崎で被爆した山田かんさんと私は、かつて体験と記憶についてやりとりしたことがありました。
　ひと昔前、八月になるとお盆の帰省ラッシュのように賑(にぎ)わう戦争回顧ものに私が、記憶すら風化していくと書いた詩でした。山田さんは、絶対に風化させてならないのが記憶だと書いて寄こされたのです。往時私は、記憶を風化させてはならないと主張する人々やメディアが、誰よりもあざとく変節してゆくの苦々しく思っている頃でした。
　山田さんは一九六九年に「人は生活を恢復する／恢復とは　痛みを記憶しておくこと」（作品「地点通過」）と歌ったその人です。いえいえあなたには文句はないんです。私はこう思ってあとはそのまま沙汰止(や)みとなりました。
　それはさておき、山田さんの詩は、風化どころか今も見事に力と光を放っています。私の好きな「墓地にて」のさわりを―。
　「おかあさん　おれはあなたの／道という名が好ましい／おれが書く詩のなかで道があれば／すなわちそれはあなただ／昭和十一年八月　三十二才で逝った／あなたにはおれの悲しみはわかってない／だがおれは庭に咲いた白菊一輪／こうしてあなたに捧げます（略）花は今年最後に咲いたもの／凍ばれる冷気のなかに咲いていた／おれの庭を見てください／あなたら　とおい死者たちよ／そのごどうしておれが生きてきたか／この小さな庭がその証しとは思わぬが／土に芽生える愛憐を／せめてあなたたちに供えるために」
　山田さんは原爆以前にあるいは原爆以外に、みずからの中に、「おとうさん」や「おかあさん」や「妹」や「ふるさと」をきちんと蔵した人でした。これらとの真向かい方に彼ならではのものがあったからこそ、彼は原爆ともしっかりと五寸にわたりあえたのです。会ったことはありませんが高い志操と細やかな情を感じさせる詩人でした。

と紹介されています。